

[講演要旨] 「天災日記」：鹿島龍蔵と関東大震災

武村雅之（鹿島小堀研究室）

鹿島龍蔵という人

僕の尊敬する所は鹿島さんの「人となり」なり。鹿島さんの如く、熟して敗れざる底の東京人は今日既に見るべからず。明日は更に稀なるべし。僕は東京と田舎とを兼ねたる文明的混血児なれども、東京人たる鹿島さんには聖賢相親しむの情 - 或は狐狸相親しむの情を懐抱せざる能はざるものなり[芥川龍之介著「田端人」(大正 14 年)]。このように芥川に言われた鹿島龍蔵は、大正から昭和初期にかけて現在の東京都北区田端のいわゆる「田端文士村」に住み、文士や美術人の間で活躍した人である。

龍蔵は一方、鹿島組（現在の鹿島建設株式会社）の組長であった鹿島精一の義弟で、鹿島組の理事長を勤める実業家でもあった。龍蔵は明治 13(1880)年生まれ。震災当時数え 44 歳で、地震発生当日の大正 12(1923)年 9 月 1 日から 8 日までの様子を「天災日記」として書き残している。

上野、田端、京橋、深川、芝

「天災日記」をもとに地震後の龍蔵の行動をまとめると、9 月 1 日は上野の院展・二科展の初日の招待日であり、寺田寅彦などと同様、上野の展覽会場で地震に遭遇した。当時鹿島組の本店は京橋区木挽町にあったが、交通機関が不通であったこと、そもそも大したことはないと思い、まずは田端の自宅に引き上げた。夕刻から夜にかけては、東京市中の火災が勢いを増し、夜空に広がる紅蓮の雲を見ながら何度も自宅の屋根に上がって、家人とともに不安な一夜を過ごした。

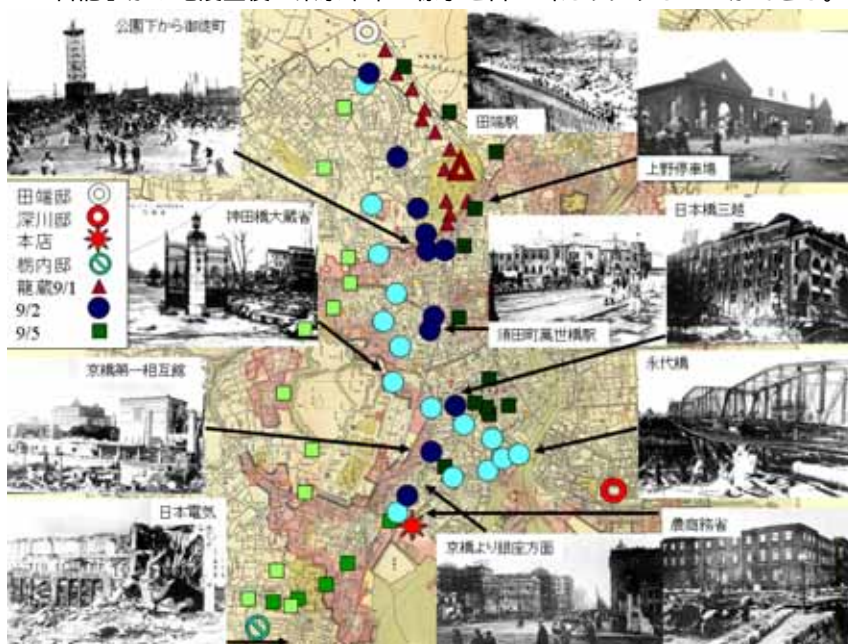
9 月 2 日になって、長男と 2 人身支度をして本店に向う。経路は図に示すように田端から動坂下に出て、不忍通りを根津から池之端へと進み、湯島天神下へ出る。そこを左折して上野広小路へ出、右折して中央通りを南下し万世橋に至る。その後、神田駅を経てそのまま中央通りをまっすぐに南下し、日本橋へ。さらに進んで京橋を渡り、銀座四丁目の交差点に着く。そこを左折してしばらく行くと三十間堀があり、そこに三原橋が架かっていた。眼前には、焼け跡が広がるばかりで、ここに来てこれまで抱いていた本店無事の一縷の望みが無残にも絶たれた。三原橋を渡ると歌舞伎座がある。そこを右折すると現在の日産自動車の本社があるところに農商務省があり、その横を通過して本店に到着した。

その間焼け跡の周辺ではごった返す避難民を掻き分け、人通りの少ない焼け跡では、焼け焦げた遺体や物、内燃中も含めた建物の残骸を後目に、焼け砂に苦しみながらやっとのことで本店あとに到着し、変わり果てた姿にぼう然となる。しばらくして我に帰った龍蔵は、組長の安否を気遣い深川の鹿島邸に行こうとするが、永代橋が渡れず失意のうちに帰宅することになった。帰宅した龍蔵を待っていたのは 200 名もの避難民であった。

2 日の夜は、走り回る軍隊や流言飛語に混乱する避難民のことなどが書かれている。9 月 4 日の夕刻にやっと組長の消息がわかり、その頃になると流言飛語に惑わされていた住民もやっと落ち着きを取り戻す。5 日に龍蔵は組員とともに再度京橋の本店あとに行き、組長が避難していた芝に向かった。そこでやっと念願の組長一家との再会を果たした。

「日記」から読めること

「日記」から地震直後の東京市中の様子を目の当たりにすることができる。それだけでなく、「日記」をベースに調べると、流言飛語や 2 日の夕刻に出された戒厳令の住民への影響などを知ることができる。また龍蔵の行動を通して民間人による救済の有り様と公的な救済のされ方、さらには親戚、知人の安否確認の実体、一般市民の生活復旧の様子、鹿島組をとおして見える被災した会社とその社員の復旧活動など、震災直後の様々な人々の活動をリアルに蘇らせることができる。それらの内容は、日記の原文とともに武村雅之編著『天災日記：鹿島龍蔵と関東大震災』鹿島出版会（平成 20 年 8 月）にまとめられた。その中では、芥川龍之介が「今日既に見るべからず。明日は更に稀なるべし」と言った東京人鹿島龍蔵の人となり震災前後の時代の変化についても触れられている。



震災直後の鹿島龍蔵の行動経路（写真は国立科学博物館）